

令和7年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」 受賞作品(作文)

兵庫県治水・防災協会会長賞 【中学生の部】

『土砂災害を防ごう』

神戸市立本山中学校 二年 竹葉 春香 さん

日本は多くの山々に囲まれた地形であり、毎年、豪雨や台風などの異常気象が原因で土砂災害が発生します。土砂災害とは、土砂が山から崩れ落ちたり、川に流れ込んだりする現象を指し、大雨や台風によって引き起こされることが多いです。これらの災害は時に命を奪い、家屋やインフラを破壊するなど、私たちの生活に大きな影響を与えます。土砂災害の防止には、個々の意識や地域社会の協力が必要不可欠です。今回は、土砂災害防止の重要性と私たちがどのように取り組むべきかについて考えてみたいと思います。

土砂災害が発生する原因は主に二つあります。一つは、自然環境の変化です。特に、豪雨や台風などの異常気象によって、大量の雨水が短時間で降ると、土壌が過剰に水分を吸収し、土が崩れやすくなります。特に急斜面の山や丘では、この現象が起こりやすいです。

もう一つの原因は、人間の活動です。森林伐採や過剰な開発によって、土壌を支える力が弱くなると、雨水が土に浸透しにくくなり、土砂崩れが起こりやすくなります。日本では、これらの自然と人為的な原因が重なり、土砂災害のリスクが高まっています。

土砂災害の影響は非常に大きく、毎年のように大雨や台風が原因で土砂災害が発生し、多くの命が失われています。例えば、二〇十四年に広島市で発生した土砂崩れでは、多くの人々が命を落とし、地域社会は大きなダメージを受けました。このような災害は、家屋や道路、インフラを破壊し、復旧には時間と費用がかかります。さらに、土砂崩れによって発生した土石流が川をせき止め、二次的な洪水を引き起こすこともあります。

土砂災害を防ぐためには、いくつかの取り組みが必要です。第一に、予防的な対策を講じることが重要です。国や自治体は、土砂災害のリスクが高い地域に対して「土砂災害警戒区域」を指定し、住民に対して避難勧告や警報を出す体制を整えています。このような早期警戒システムは、災害が発生する前に人々の命を守るために不可欠です。また、山の斜面に防護柵を設置したり、土砂を固定するためにネットを張ったりする工事が行われています。これにより、土砂が崩れ落ちるのを防ぐことができます。さらに、斜面に土を積み上げることで、土砂崩れを防止する方法もあります。これらの技術は、土砂崩れが発生しにくくするために非常に効果的ですが、完全に災害を防ぐことはできません。

第二に、森林の保護と再生が重要です。森林は、土壌を安定させる役割を果たしています。木々の根は土壌をしっかりとつかみ、雨水の浸透を助けるため、森林が健全であれば土砂崩れ

のリスクを大きく減らせます。

しかし、過去には開発のために多くの森林が伐採され、その結果、土壌の保持力が失われました。現在では、森林再生活動が積極的に行われており、植林や森林保護の重要性が再認識されています。

また、住民一人ひとりが土砂災害についての理解を深め、防災意識を高めることが必要です。土砂災害が発生するリスクが高い地域に住んでいる人々は、日頃から避難経路を確認し、避難場所や避難方法を把握しておくことが重要です。災害が発生した場合、迅速に避難することで命を守ることができます。特に、梅雨の時期や台風シーズンには、気象情報に敏感になり、危険な状態が予測された場合には早めの避難を心がけるべきでしょう。

土砂災害防止には、地域社会の協力も欠かせません。地域住民が一丸となって防災訓練を行うことが、災害発生時に迅速かつ的確に行動できるために非常に効果的です。学校や地域団体が協力して、土砂災害のリスクについて学ぶ機会を提供することが、次世代の防災意識を育むことにもつながります。

また、地域ごとに土砂災害に強い地域作りを進めることも大切です。例えば、危険な場所に新たな住宅を建てないようにする、土砂災害のリスクが高い場所では開発を控えるといった地域づくりが求められます。地域住民が一丸となって協力することで、災害時にお互いを助け合うことができ、より迅速に復旧することができます。

土砂災害防止は、国や自治体だけでなく、私たち一人ひとりの意識と行動にかかっています。予防的な対策として、土砂災害警戒区域の設定やインフラ整備が進められていますが、それだけでは不十分で、私たちが日々の生活の中で防災意識を高め、適切な備えをすることが、災害を未然に防ぐために最も効果的な方法です。また、地域社会全体で協力し、教育を通じて防災意識を深めることが、災害のリスクを減らすための重要な取り組みとなります。土砂災害防止に向けて、私たち一人ひとりができることを実践し、未来の安全な社会を築いていくことが求められています。

『備えあれば憂いなし』

関西学院中学部 一年 堀川 悠真 さん

僕は、ニュースなどに出るような大きな土砂災害にあったことがない。だから土砂災害の本当の怖さを知らない。しかし、僕が今、住んでいる街では、過去に大きな土砂災害があった。土砂災害とは身近なことであると思い知らされた。

舞台は、兵庫の県庁所在地、神戸。この街は山や海などの自然がたくさんあり、すごくいい街だと思っている。しかし、そんな神戸市は、1995年の阪神淡路大震災など、数多くの大災害を経験し、復興してきた。その大災害の中に今回の話の中心となる「阪神大水害」がある。

1938年の7月2日。気温の平均が22度と比較的涼しかった。降水量も、一日の合計が、7.2ミリと少なかった。まさかこの雨が、後に記録的大雨と変化し、人々の記憶に残るような大水害を引き起こすと想像した人はほとんどいなかったと思う。しかし、翌日の3日。一時間に降った、最大降水量が18.2ミリを記録する大雨となり、翌4日には1日の合計が149ミリ。5日には270ミリの降水量を記録した。この3日間の集中豪雨により、六甲周辺の山の斜面が崩壊し、巨岩や土砂などがものすごい勢いで市街地に押し寄せた。また、河川も氾濫し、街を襲った。最終的な記録は、死者・行方不明者695人、被害家屋数119895戸という悲惨な結果となった。

なぜ、こんな大惨事になってしまったのだろうか。それは、六甲山の地質的特性が原因だった。被害が大きかった六甲山の南側は、花崗岩地質で風化して脆い「真砂土」となっており、急峻だったため、がけ崩れを起こしやすくなっていた。そこに異常な集中豪雨が重なったために、このような結果になってしまった。

このような土砂災害で被害にあう方々を減らすためにはどうしたらいいのか。まず、自分が住んでいる場所のハザードマップを確認することが大切だと思う。その次に、避難場所への避難経路の確認、避難バッグの中身確認などがあげられる。これらは個人でできることだと思う。

次に市や県などが中心となっていくことだ。例えば、「砂防ダム」の建設だ。砂防ダムは、通常のダムとは違い、土砂をせき止め、河川勾配を緩やかにして侵食を防ぐことに特化しており、貯水機能をほとんど持っていない。だからこそ、土砂をそこでカットし、下流部の被害を大幅に減らしてくれる。砂防ダム以外にも「山腹工」や「擁壁」などといった例があげられる。しかし、これらには、建設コストや自然破壊などのデメリットもある。

僕は、土砂災害による人的被害や、家屋の被害を減らすためには、近隣の方や、市や県が協力していくことが大切だと思う。土砂災害警戒情報のレベル4「避難指示」がもう出ているなら、もう退いと考える方がいい。少しでも危険を感じたならば、身の回りの安全を確保しながら逃げるべきと考える。もし、余裕があるなら近隣の方に声をかけながら逃げた方がいい。

い。その行動が尊い人の命を助けるかもしれない。だからといって自分の安全が最優先だ。自分が危険な状態になってしまったら元も子もないのだから。他の災害でも同じことが言えるが、早め早めの準備、避難が大切だ。災害が起こる前から家族で話し合っておこう。そして、どんなことが起きてもいいように常に備えておこう。最後に伝えたいことがある。この言葉を胸に止めておいてほしい。

「備えあれば憂いなし」